

健康医療学園都市構想の中核施設

④日本医科大学千葉北総病院 (千葉県印西市)



千葉県災害拠点病院(基幹災害医療センター)でもある

千葉県北西部の3市にまたがり、東京と成田空港の間に位置する「千葉ニュータウン」。六つの地区の東端にある印旛日本医大地区に、日本医科大学千葉北総病院は建つ。印西市と合併する前の旧印旛村および千葉県企業庁が掲げていた「健康医療学園都市」構想の中核施設として、1994年に開院した。同構想は、水と緑豊かな丘陵を利用した82.5ヘクタールのエリアに、医療施設、教育施設、将来計画の三つのゾーンを展開。治療と予防の総合医療の提供を目的とした街づくりを目指している。

医療施設ゾーンの中央に位置するのが同病院だ。診療科は17科、病床数は600床。将来の増築に備え、増築部分とシンメトリーな構造、デザインになるように造られている。ほかに、看護専門学校や学生寮、看護師寮、エネルギーを集中的に管理するエネルギーセンターも建つ。保存食などを保管している備蓄倉庫、ヘリポートも設けられ、東日本大震災で活躍した。

院内の随所に、絵画や写真が目につく。その数約250点。開院当初から、癒やしのための芸術「ヒーリング・アート」を推進し、患者を元気づけている。



エントランスホールでは「ホスピタルコンサート」などのイベントも開かれる



オーダーメイド医療室。これまで患者約5400人の疾病データを登録



「ホスピタルストリート」は災害時、救急医療のスペースとなる



シャワー室も備えた特別室。成田空港に近いこともあり、海外の要人も治療に訪れる



「ドールコーヒー」や「ローソン」など商業施設も充実



年間700件以上出動し、重症救急患者の救命率向上にも寄与しているドクターヘリ

人の動線や物品搬送の要となる「ホスピタルストリート」でも毎年秋に、MOA美術館(静岡県熱海市)児童作品展の印旛地域入賞者の作品約200点を展示。早朝から見に来る患者もいる。

患者のプライバシーを守るため、病室の入り口には名札を掲げず、タッチパネル方式の「個別情報廊下灯」を設置。また、患者の不安や疑問に細やかに対応するため、医療福祉、薬剤、看護、栄養の各分野における相談窓口を整備している。アメニティー(快適性)づくりの一環として商業施設の充実にも力を入れており、「コンビニエンスストア『ロ

ーソン』の24時間・年中無休の営業は好評」と山本臣生・庶務課課長。

2001年に、川崎医科大学附属病院(岡山県倉敷市)、聖隷三方原病院(静岡県浜松市)とともに全国で初めてドクターヘリを導入。県内はもとより、茨城県南部までカバーしている。09年度まで出動件数は日本一多く、フライトドクターの姿を描いたフジテレビの連続ドラマ『コード・ブルー』のロケ現場にもなった。

開院から17年。印旛地域(7市2町、総人口約70万人)の基幹病院として確たる地位を築いている。

「恕」と「協」に込めたさきがけの意思

④ 東葛クリニック病院 (千葉県松戸市)



本館屋上。
近くを江戸川が流れ、東京スカイツリーや遠く富士山も臨める

〈其 接也以恕、其治也以協〉——東葛クリニック病院が掲げる理念は漢文である。「その接するや恕をもってし、その治するや協をもってす」と読み下す。現在の理念を定めたのは、2002年に就任した東仲宣理事長。幹部職員が知恵を出し合い1年間をかけて練り直した。この文言には38年前、松戸の地における血液透析療法のパイオニア的存在として、前身である「東京クリニック」が誕生して以来の歩みが集約されている。

病院の特徴の一つが「ヒーリングアート」。30年前、故鈴木満前理事長が米国の医療機関と交流

する中、施設に美術作品を導入する試みに着目した。

鈴木氏は彫刻家の望月菊麿氏に監修を依頼。望月氏は競売などの機会を通じ、絵画や彫刻の作品を集めていった。現在では100点以上もの作品を収蔵。数カ月ごとに掛け替えながら展示している。専務理事を務める山根伸吾氏が語る。

「作品はほぼすべてが抽象的な作風。患者の受け止め方が偏らないような配慮があると聞いています。見た人がそれぞれ感じてくれればいい」

作品はいずれも明るい色彩が印象的。「患者さんの重く沈みがちな気持ちを明るくし、回復を手助



本館玄関。病院の外でロゴがあるのはここだけ



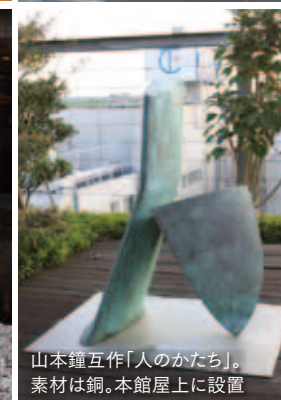
本館1階フロア。
木材の風合いを生かした暖かさに包まれる



田中幸人作「舟日」。本館中庭。
病院による病からの解放を全体で象徴



目立つ看板のない外観は一流ホテルを模している



山本鍾互作「人のかたち」。
素材は銅。本館屋上に設置



男性用化粧室を示すマーク。
「分かりにくい」との声もあったが、美観を重視

ける」という鈴木氏の思いを代弁している。

建物からも鈴木氏ならではの意思を感じ取れる。

「一歩踏み入れると、独特のにおいがする。いたるところに掲示物が張ってある。そうした環境はなるべく避けたいと考えています」(山根氏)

医療技術はもちろんだが、「場」を提供することも医療機関の役割。鈴木氏はそう考えていた。

慢性腎臓病の透析患者中心の医療を展開する。亡くなるまで透析を受け続ける人が大半だ。「病院で少しでもくつろいでほしい」——根幹にあるのはまさに「恕」、思いやりの心である。

「協」(力を合わせる)の精神はこれも早くから取り組んできたチーム医療に現れている。多職種が治療について積極的に意見を出し合う。時に新人が戸惑うほど、柔軟な組織が実現している。

「病院らしからぬ病院」「美術の導入」「チーム医療」——現在でこそ当たり前になった発想。だが、ここではもっと前から当たり前だった。

「これまで培ってきたコンセプトは5年、10年先も基本として生かしていきたい。新しい病院を造るとしても、変わることはありません」(同前)

病院は絵と共に今日も患者を迎えている。